

クローズアップ

NGO・NPO

八王子国際交流団体連絡会

～協働によるダイナミズム～

「八王子市国際交流コーナー」愛称“koko”

設立までの経緯

八王子市では二〇〇四年度より、市民、市民団体、行政の「協働」のもとにさまざまな企画が始まりました。その拠点として、JR八王子駅前の商業ビルの一階に八王子市国際交流コーナーがオープンされました。八王子市には、他自治体のように既に何年も前からある国際交流協会のような組織がありませんでした。しかし、いくつかの民間のボランティアグループが一五年以上も前から地道な活動を続けておりました。手弁当で、手作りで集まっているボランティアグループの情熱は素晴らしいエネルギーがあり、五百万都市、八王子に住む八〇〇〇人以上の外国人に対する日常生活の支援、交流に日々汗を流していました。

そんな中、行政側からの呼びかけにより、市内の国際交流に携わる五つの団体がネットワークを組み、市との協働により「八王子国際交流団体連絡会」が誕生しました。

組織

五つの団体

八王子にほんごの会

会員数 二〇〇人

外国人と一対一での日本語学習支援(外国人児童、生徒も含む)

八王子国際友好クラブ

会員数 一六〇人

日本語教室、多言語(六カ国語)のニュースレター発行、異文化、食文化研究、リサイクル活動、日本文化紹介等

世界の子供と手をつなぐ学生の会(CCS)

会員数 四〇人

在日外国人児童、生徒に対する学習指導

アクティヴライン八王子

会員数 二〇人

小、中学校の国際理解教育授業のサポート等

エンドウスタジオ

会員数 一五人

映画、文学、音楽等を通して世界の国々の事を知る

特徴

各団体にはそれぞれ特徴があり、独自の活動方針で長年活動してきているので、連絡会は各団体の活動を尊重しつつ活動しています。月一回の運営委員会には、各団体から二～四名の委員が出席し、市の職員もオブザーバーとして参加し、熱心な討論が繰り広げられています。

活動内容

*kokoシネマサロン 毎月第一日曜日

午後

世界の映画上映とトーク

トークは映画にちなんだ内容になっています。今までに市内外の大学教授、映画監督、医師、作家の方などにゲストとして来ていただいています。

*世界の人とふれあいタイム 毎月第三日

曜日 午後

世界のさまざまな国からのゲストを呼んで、市民との交流のひとつを過ごして

八王子国際交流団体連絡会

〒192-0083 東京都八王子市旭町9番1号 八王子スクエアビル11階

TEL & FAX 0426-42-7091 URL : http://homepage3.nifty.com/koko-8/index.htm



↑留学生八王子ふるさとプログラム：秋のバーベキュー大会

とんど日本
の家族
との交流
をしない
で帰国す
るとい
実情を知
り、八王
子を留学
生たちが
第二のふる
さとと

もらいます。
今までの
ゲスト：バン
グラディシ
ユ、アゼルバ
イジャン、ル
ーマニア、中
国、インド、
オーストリ
ア、モロッコ、
タイ、ジンバブエ、アンゴラ、インドネシア、
ベルギー、韓国、シリア、ベラルーシ等
*外国人のための生活相談会 毎月第二
日曜日 午後
*留学生八王子ふるさとプログラム
二〇〇五年四月よりスタート
八王子市域には三三の大学等があり、
留学生が三三〇人以上もいます。



↑世界の人とふれあいタイム：ベラルーシ大使館一等書記官をゲストに迎えて

受付カウンターには、各団体のメンバ
ーが交代で当たり、外国人や市民への応対
をしています。
八王子市学園都市センターの情報コー
ナーの一角に位置しているということも
あり、来館者への無料のインターネット閱
覧利用の受付も同時に行っています。最
近、外国人のインターネット閲覧利用が多
くなってきています。また、三〇人ほど入
れる教室は、日本語教室、交流会、ミーテ
ィングなどでフルに活用されています。

学校からの要請により、国際理解教育
の支援を行っています。
事前の打ち合わせを大切にし、実り多
い授業になるように心がけています。
年間を通して数回、同じ国の人と交流
を望む学校や、一度に十数人の外国人を呼
び、学校全体で国際理解教育を実施する
など、さまざま支援を行っています。
*八王子市国際交流コーナー（午前一〇時
～午後七時）

小、中、高等学校の国際理解教育授業への支援
学校からの要請により、国際理解教育
の支援を行っています。
事前の打ち合わせを大切にし、実り多
い授業になるように心がけています。
年間を通して数回、同じ国の人と交流
を望む学校や、一度に十数人の外国人を呼
び、学校全体で国際理解教育を実施する
など、さまざま支援を行っています。

まさに協働によるダイナミズムを感じる
ことができる催しとなりました。
今後の抱負、課題
外国人と共に暮らす豊かなまちづくりの
ために、やらなければならぬ課題は災害
時の対策、高齢化社会への対応など山積みの
状態ですが、広く外にも目を向け、海外諸国
に対する支援などを行っている多くの団体
とのネットワークを構築し、さらに幅広い交
流・支援活動を進めていきたいと思ひます。

平成一七年度地域国際化協会等先導的施策
支援事業助成事業
「国際理解推進事業 チェルノブイリ」
大地・水・いのちのこころ
二〇〇五年一月二五日～二七日の三日
間、八王子国際交流団体連絡会が呼びかけ
人となり、七団体が実行委員会を結成、チェ
ルノブイリ原子力発電所事故の被災地をテ
ーマに地球環境を考へる催しを行いました。
内容は、被災地が舞台となつて映る映画「ア
レクセイと泉」の上映と監督の講演、被ばく
者であるナターシャ・グジーによるウクライ
ナ民族楽器バンドウーラの弾き語りコンサ
ート、広河隆一氏の被災関連写真展、チェ
ルノブイリの子どもと八王子の小学生との
絵画交流展「留学生が考へる地球環境問題」
をテーマとして八王子市域三三大学の留学
生による日本語弁論大会、そして市民と外
国人との交流パーティーです。特に交流パ
ーティーは予想外の大人数の方が参加され、会
場は大盛況でした。

クローズアップ

NGO・NPO

特定非営利活動法人

NPO愛知ネット

～災害救援からまちづくり支援まで～

特定非営利活動法人NPO愛知ネットの取組み

すべての活動は 災害時の情報のために

特定非営利活動法人NPO愛知ネットのメインミッションは『災害救援』です。災害救援といっても、スコップなどを持って現場で作業するわけではありません。現地の被災者のニーズを集め、全国の災害救援ボランティアの皆さんに、ニーズ情報を発信していきます。

私たちは、常に「災害時」を意識して、次の三つの活動を展開しています。

1 防災・災害救援に関する活動

二〇〇〇年に発生した有珠山噴火のとき、私たちは初めて災害救援活動を行いました。NPO愛知ネットのスタッフが現地の災害支援センターや避難所に入り、そこからインターネットを使って全国に災害情報を発信しました。二〇〇〇年九月に発生した東海豪雨災害の救援活動から、二〇〇四年一〇月に発生した中越地震の災害救援活動まで、愛知県内はもとより県外の被災地からの要請を受け、災害救援活動を行っています。

二〇〇四年に発生した中越地震の時には、行政、企業、市民団体を組織する「愛知中越支援ネットワーク」を作り、復興支援活動を一〇カ月間協働して行いました。緩やかなネットワークを作り、継続的に復興支援したことが評価され、二〇〇五年九月に内閣

府防災担当から表彰を受けました。これを機に、今後もボランティア、企業、行政が協働する災害救援、防災対策を進めていきたいと考えています。

ところで、地震などの災害が発生した時、あなたは、まず何をしますか。最初にするのは、「自分の命を確保すること」です。その後、「家族の安否を確認」します。家族の安否が確認できて初めて、その次のステップの行動に移ることができます。

そんな考えで、私たちは『携帯電話を利用したあんびメールシステム』を開発し、独自事業として運営しています。震度5以上の地震が発生した時、気象協会が発信する情報を直接受けて、登録会員へ「安否確認メール」を自動発信します。登録会員がそのメールに回答すると、会員の家族（あらかじめ登録しておく）あてに、安否をメールで連絡します。既に一〇〇〇人以上の登録会員が、あんびメールを利用しています。

もちろん日ごろから利用できるものでなく、いざという時に役に立ちません。現在、平成一七年度内閣府市民団体等支援総合事業の一つとして「地域情報流通システム」による《安全・安心》プロジェクトを地元行政と協働して推進しています。自分のまちの課題を「自分ごと」として捉え、自分たちの力で《安全・安心》なまちを築くために、携帯電話によるメールを活用した「地域情報流通システム」の構築を目指しています。

(特活)NPO愛知ネット

〒446-0007 愛知県安城市東栄町1丁目7-22 内藤ビル TEL 0566-98-5352 FAX 0566-98-5565

E-mail : info@npa-aichi.or.jp URL : http://www.npo-aichi.or.jp/npa/

2 市民活動活性化のための支援活動

一〇年前の阪神淡路大震災の時、住民パワーによる助け合いが力を発揮しました。あれから一〇年、既に自治的な活動を展開している市民団体(町内会、ボランティアグループなど)による「共助」は、さらに強力な救援活動が期待できるのではないのでしょうか。このような市民団体と日ごろから協働できる関係を持つことは必須です。

現在、地元の二つの自治体から、地域の市民団体を支援するための市民活動センターの管理・運営の委託を受けています。ボランティアさんと市民団体とのマッチングや、市民団体の問題解決のお手伝いが主体の業務です。そして、いざという時に地域の市民団体と連携できる、日ごろからの絆づくりを進めています。

3 在住外国人の支援に関する活動

私たちが暮らしている東海地区にはブラジル人が多く住んでいます。病院における診察や、行政窓口での手続きなど、日常生活上避けられない緊急の場面で、伝えたい内容が正確に伝わっているのかどうか、いつも不安に思っています。

「とにかく言葉さえ通じれば」と考え、派遣通訳に比べて「コストがかからず、気軽に利用できる」「いつもトーク」電話通訳を、独自に提供しています(図参照)。二〇〇四年度、



↑いつつもトークの概要

経済産業省市民活動活性化モデル事業の補助を受け、「IP電話システムを利用した多言語電話通訳センター」を構築しました。そしてこの地区の総合病院と契約し、診察室の中から電話をかけてもらい、ポルトガル語および一部スペイン語で診察時に必要な通訳を実施しています。

日本に住んでいるのは南米からの人たちだけではありません。中国語、韓国語、タガログ語などいろいろな言語を必要とする人たちが大勢います。三河地域にはブラジル人が多いので、ポルトガル語での通訳を提供することができました。同じように、同じ言葉を使う外国人が集住する地域で通訳活動を展開しているNPOや市民団体がいくつかあります。IP電話システム技術を利用して「多言語通訳グループ」が形成できなれば、団体相互の連携を模索し始めました。IP電話を利用して電話を格安に転送することができれば、一つの団体が一言語を提供したとしても、よりたくさんの言語で通訳を提供することができるようになります。さらに、通訳スタッフの通訳品質の向上を目的に、二〇〇四年三月および二〇〇五

年二月に「医療通訳養成講座」を開講しました。一二月には「行政通訳養成講座」を開講しました(写真参照)。「行政通訳」が取り扱う場面・範囲は広く、しかも専門的な用語(行政用語、法律用語など)が多いという特徴があります。そういう意味では、「行政通訳の品質」を向上させ、一定に保っていくという工夫が、今後とも継続的に必要ではないでしょうか。



↑行政通訳養成講座の様子

そして『まちづくり』

このように、私たちは「災害に強いまちづくり」の支援を行ってきました。その根幹技術は「マッチング」であると考えています。被災者のニーズと救援ボランティアさんとのマッチング、ボランティアを求める人としてたい人とをマッチング、さらには言葉が通じない人たちを通訳機能でマッチングするというわけです。このマッチング機能を活かし、人と人、人と地域とを結び付ける、これがこれからの『まちづくり』に必要なと考えられています。

クローズアップ

NGO・NPO

特定非営利活動法人

チェルノブイリへのかけはし ～心のトビラを開く～

はつめい

一九八六年四月二六日に旧ソ連・チェルノブイリ原発放射能漏事故が起りました。事故発生から既に二〇年近く経過し、人々の記憶から風化されつつあります。

この事故により、大量の放射性物質が大気中に放出され、ベラルーシには死の灰の約七〇％が降下しました。汚染地には今なお約二〇〇万人が生活しており、そのうち一四歳以下の子どもが約八〇万人いるといわれています。

放射線の身体への影響は、急性放射線障害やガンが発症等いろいろありますが、特に子どもたちは今も、母親が被ばくしたことに伴う遺伝的な影響を大きく受けており、また、汚染地で収穫された野菜等を取ることにより、頭痛、貧血、腹痛、目まいなどの症状で苦しんでいます。



こうだった状況の中、ベラルーシにおいて日

本の多くのNGOにより被ばく者に対する人的・物的援助活動が行われています。今回は、ベラルーシの子どもたちへの支援活動を行っている「チェ

ルノブイリへのかけはし」という団体を取材しましたので、紹介します。

チェルノブイリへのかけはし 団体概要

(特活)チェルノブイリへのかけはし(以下、かけはし)は一九九二年、札幌市に設立されました。代表者は野呂美加さん。事務局はボランティアたちで運営する「ボランティアショップ萌」内に設置されています。

かけはしではベラルーシの子どもたちを日本に受け入れる里親活動を中心に行っており、その活動は募金やショップ、年数回行われるバザーの収益金などで支えられています。

これまでの活動内容

かけはしは野呂さんを含め、わずか三人で設立されました。当初は「全部の子どもたちを連れて来られないのは差別の活動である」「一月月の滞在では子どもたちはよくなる」「薬を送った方がたくさんの子どものたちを救える」といった批判が寄せられたそうです。しかし、野呂さんらは、私たちにできることを着実にやっていきたいとして次に掲げる活動を行ってこられました。

①被ばく児童の日本への招待

ベラルーシの子どもたちを日本に招待し日本の「里親」の元で一定期間生活させる活動です。後ほど詳しく活動内容について触れますが、これまでの一四年間で五五二人

の子どもたちを招待しました。

② 汚染された地域に住む子どもたちへの直接援助

かけはしでは、招待した子どもたちが帰国する際や、日本からの訪問団が現地を訪れるときに、ビタミン剤や被服、食料品などの救済物資を直接届けています。

③ ベラルーシでの現地活動に対する資金援助

里親活動は世界中に広がっており、現地の学校の先生やボランティア団体が各国の要請に基づいて、子どもたちの行き先を振り分けています。かけはしでは現地スタッフとも話し合いを持ちながら、子どもたちの受入れを決定しています。また、現地協力員の活動資金や現地関連団体に対しての資金援助を行い、活動が円滑に行われるよう、支援しています。

里親活動

ベラルーシの子どもたちは、現在も汚染された土地に住み、その土地で栽培された野菜などを食べています。野菜等には放射性物質が蓄積し、それを食べる子どもたちにはさらに蓄積されることとなります。これにより、子どもたちの胃腸は弱り、次第に体のどこかに影響が出てきます。

このような子どもたちを日本に呼び寄せることにより、子どもたちは一カ月もの間、里親の元で汚染されていない食べ物を食べ、里親家族の愛情に包まれることから、とて

も元気になっていきます。事務局長の佐藤啓子さんによると、現在、里親さんたちは札幌に二〇家族、帯広に一〇家族、本州に八家族ほどあるそうです。

今回、札幌市の事務局におうかがいし、野呂さんだけでなく、里親さん方にもお話を聞く機会に恵まれました。次に里親さんの声を紹介いたします。

木村富士子さん(札幌市)

「一一年前から子どもたちを受け入れていきます。二年前、家族旅行先の旅館のテレビでかけはしの活動を知ったのがきっかけでした。父親(四年前に死去)が、子どもたちを受け入れられないかと提案し、家族で相談した結果、里親を引き受けることになりました。

最初の年は、一〇歳と九歳の子どもを二週間受け入れました。最初の二週間はほかの家庭で保養し、残りの二週間をわが家で過ごしてもらいました。これまでいろいろながとがありましたが、わが家の場合、両親がとても積極的に関与してくれたこともあり、家族で助け合いながら何とかやってこられました。女の子はホームシックにかかりやすく最初のうちは泣いたりしていましたが、徐々に慣れてきて、最後のころになると言葉は分からなくてもお互い通じ合えるようになりまます。そして、最後に空港でお別れするときは、とても悲しくなり、もう二度と引き受けないと誓います。しかし、月日が過ぎ、子どもたちを受け入れる時期になると、今度はどんな子どもたちが来るのかなと楽

しみになります。近所の人たちも夏が近くと私に、今年はまだ来ないのと聞いてくるし、子どもたちとも一緒に遊んでくれます。地域にも支えられていると感じます。

これからも周りの協力が得られる限り、子どもたちを受け入れていきたいと思っています」。

吉田 政美さん(札幌市)

「三年前に初めて里親になりました。当時小学五年生になる娘が、近所でロシア語を教えている方から、かけはしの活動を教わり、私に『どうしてわが家では受け入れられない』と聞いてきました。私は悩みましたが家族の支えもあり、引き受けることに決めました。

里親として苦労した点は食事です。子どもたちはベラルーシでの食生活が質素なものなので、日本に来ては豊かな食材や料理に慣れず、向こうで食べていたじゃがいもなどをずっと食べ続ける子どももいました。また、不眠症の子どものも多かったです。受入れに当たっては、近所にも説明して回りました。近所の方からは特に強い抵抗もなく、す



↑日本の子どもたちと一緒に

んなりとなじんでいただいているようです。子どもたちに愛情を持って接している、その愛情が跳ね返ってくるのが分かります。心のつながりを感じます。私にできることをやってただけですし、これからも続けていきたいと思っています」。

今回の取材の際は、ベラルーシからの子どもは来日していませんでしたが、以前受け入れた子どもたちなどから寄せられた言葉を紹介します。

エカチエリーナ・スタルボウスカヤさん

「私は、かけはしの活動は日本とベラルーシの双方にとっても意義があると思います。被災した私たちが、『自分たちには、こんなに親身になって助けてくれる人たちがいて、自分は独りぼっちではない』と肌で感じるのが、私たちをどんなに勇気付けるでしょうか。

子どもたちは、未来そのものです。自分の国にとっただけでなく、子どもたちは世界中にとっただけ『未来』です。それを行動で示す、かけはしのような団体の存在は、世界中の子どもたちにとっただけ『希望』ではないでしょうか」。

イーゴリ・スマジエンニさん

「ベラルーシでは、たまに『外国への保養は子どもを悪くするし、子どもたちはわがままになって帰ってくる』というような声がかかります。もちろん、そういう子どももいますが、ほとんどは行く前よりよくなります。両親たちからは、『子どもたちは、日本の友達か

らいただいた幸せを持って帰ってきました。もちろん、元気にもなりました』と言われました。

実際に、一カ月の保養のときに得られたビタミンの量は、ベラルーシでは一年間かけても得られません」。

ボランティアショップ萌

取材当日は、札幌市内は大雪に見舞われ、ショップの周りには人もまばらでしたが、ショップ内の事務局で里親さんにお話を伺っている最中にも、数人のお客さんが来店されるなど、ショップが地域に根付いていることを感じました。

ショップは、火曜日・日曜日の午前11時～午後6時まで、里親さんたちボランティアによって運営されています。

二〇〇四年上半期の収益は、二二万四六一〇円でしたが、その収益は事務所の運営経費に消えていくそうです。

さらに、年に数回、バザーを開催しますが、その際は五〇人にも上るボランティアが集まり、とてもにぎわうそうです。

現地から子どもたちを渡航させるのには一人



↑ボランティアショップ萌

当たり一三万円程度要し、募金や書き損じがきの収益金で賄われているとのこと。です。

今後の活動および展開 国際交流基金地球市民賞の受賞

二〇〇五年一月十四日は、かけはしにとって、喜ばしい一日となりました。国際交流基金が主催する二〇〇五年度「国際交流基金地球市民賞」を受賞したのです。

この賞は、地域に根差した国際交流の重要性が広く認識されたことを受けて、一九八五年に「国際交流地域交流振興賞」として制定されましたが、二〇〇四年度に「国際交流基金地球市民賞」に改められ、地域の変革や活性化につながる国際的な地域間交流や文化交流、相互理解に貢献した団体に贈られるものです。

受賞当日は、かけはしの野呂さんや全国各地から里親が集まり、その受賞の喜びを分かち合いました。

野呂さんは「賞はこれまで活動にかかわってくれた方々全員やベラルーシの子どもたちとその家族みんなで受け取らせていただきました。以前、かけはしの名前も挙



↑授賞式の様子

(特活)チェルノブイリへのかけはし

〒064-0917 札幌市中央区南17条西6丁目1-1 TEL & FAX 011-511-3680

E-mail: info@kakehashi.or.jp URL: http://www.kakehashi.or.jp/index.htm

がったと聞きました。今回一番いい時にいただいたと思います。二〇〇六年はチェルノブイリ原発事故二〇周年、かけはしの活動も一五周年を迎えます。活動当初はかけはしを橋渡しに、現地に救援物資を送ることができたらと思っていました。しかし、いろいろなことを経験して、「心のトビラ」を開くことが、それでつながりあうことが大事なことだと悟りました。子どもはどこにいても瞬間、瞬間を生きようとしていると感じています。私たちも最後までかかわっていきたいと思っています。今この活動に力を入れていただけます」と語り、今後の活動の中間点であることを強調します。事務局長であり、里親としても活動されている佐藤啓子さんは「私たちは、この賞をもらうために活動してきたわけではありません。しかし、結果として、こういった賞をもらえたことは、活動が認められたと思えますし、うれしく感じます。これを機に、私たちの活動を皆さんに知っていただき、一人でも多くの人たちに活動に賛同していただき、多くの子どもたちが救えれば、とてもうれしく思います」と話します。

個人としての活動

野呂さんと佐藤さんに今後の活動について質問したところ、かけはしとは別に、個人の活動も行っているそうです。これは団体としての活動では資金面などで難しいことから、自分だけで以前受け入れた子どもたちも再度呼び寄せ、日本語や日本料理を学ばせているとのこと。もちろん、かけはしの活動もこれまでの実績を踏まえて、さらなる活動を展開していきたいと考えています。NPOという団体の活動だけには頼らない個人の活動について、一つのあり方をみたような気がします。また、野呂さんは今後も団体を運営するに当たっては行政からの補助金は考えていないが、バザーの周知などの協力をいただけるとうれしいと話しておられました。

やくざり

地域には、地域レベルでの草の根国際交流・協力を行っている団体が数多く存在します。ほとんどの団体が、活動資金や人材が不足するなどの困難な状況の中、崇高な理念を持って、着実にその活動を行っています。

私がこの取材を通じて感じたことは、地方も外国とつながっているということです。地域によっては、観光等で訪れる外国人も少なく、また、在住外国人もほとんどいないところもあるなど、身近に外国を感じられない場所もあります。しかし、かけはしのよ

うな日本からの支援を求めている外国は数多くあります。

取材させていただいた野呂さんをはじめとするかけはしのスタッフや、ボランティアが一体となってこの活動を支えています。これらの人々はこれまでボランティアに無縁の人が多かったとのこと。かけはしの活動を知って、自分にできることがあるのではないかと参加したそうです。

地域にはこういったボランティア精神を宿した方々がたくさんいらっしゃると思えます。こうしたボランティアの方々を上手に結集していけば、地域の特性に応じた、大きな力を発揮することができます。今回取り上げたかけはしの活動事例が、地域で何かしたいと考えていらっしゃる方々の参考となれば、うれしく思います。

最後に、ある里親さんの言葉で本稿を締めくくりたいと思います。

『子どもを抱きしめて、伝わってくるぬくもりは、生きるエネルギーに変わります。また、幸せを共有できるときでもあります。これは人間として原点を実感する瞬間だと思います』。

参考文献
「愛と放射能の天秤」子どもたちにとって一番大切なもの〜NPO法人チェルノブイリへのかけはし

(財)自治体国際化協会

支援協力部地域支援課

主査 内山 一弘(鹿児島県派遣)